Ⅲ　耕地の利用状況

１　農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率（令和３年）

(1)　田畑計の作付（栽培）延べ面積は397万7,000haで、前年並みとなった。

田畑計の耕地利用率は91.4％で、0.1ポイント上昇した（表14）。

(2)　田の作付（栽培）延べ面積は220万haで、前年並みとなった。

田の耕地利用率は93.0％で、前年に比べて0.1ポイント上昇した（表14）。

(3)　畑の作付（栽培）延べ面積は177万7,000haで、前年並みとなった。

畑の耕地利用率は89.6％で、前年に比べて0.2ポイント上昇した（表14）。

表 14　令和３年農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率

区分	田畑計			田			畑		
	作付（栽培）延べ面積	前年との比較 対差	前年との比較 対比	作付（栽培）延べ面積	前年との比較 対差	前年との比較 対比	作付（栽培）延べ面積	前年との比較 対差	前年との比較 対比
	ha	ha	%	ha	ha	%	ha	ha	%
作付（栽培）延べ面積	3,977,000	△ 14,000	100	2,200,000	△ 9,000	100	1,777,000	△ 5,000	100
水稲（子実用）	1,403,000	△ 59,000	96	…	nc	nc	…	nc	nc
麦類（子実用）	283,000	6,800	102	180,400	4,000	102	102,600	2,800	103
大豆（乾燥子実）	146,200	4,500	103	115,600	1,400	101	30,500	3,000	111
そば（乾燥子実）	65,500	△ 1,100	98	38,500	△ 400	99	27,000	△ 800	97
なたね（子実用）	1,640	△ 190	90	…	nc	nc	…	nc	nc
その他作物	2,077,000	34,000	102	460,800	43,600	110	1,616,000	△ 10,000	99
耕地面積	4,349,000	△ 23,000	99	2,366,000	△ 13,000	99	1,983,000	△ 10,000	99
耕地利用率	91.4	0.1ポイント	－	93.0	0.1ポイント	－	89.6	0.2ポイント	－

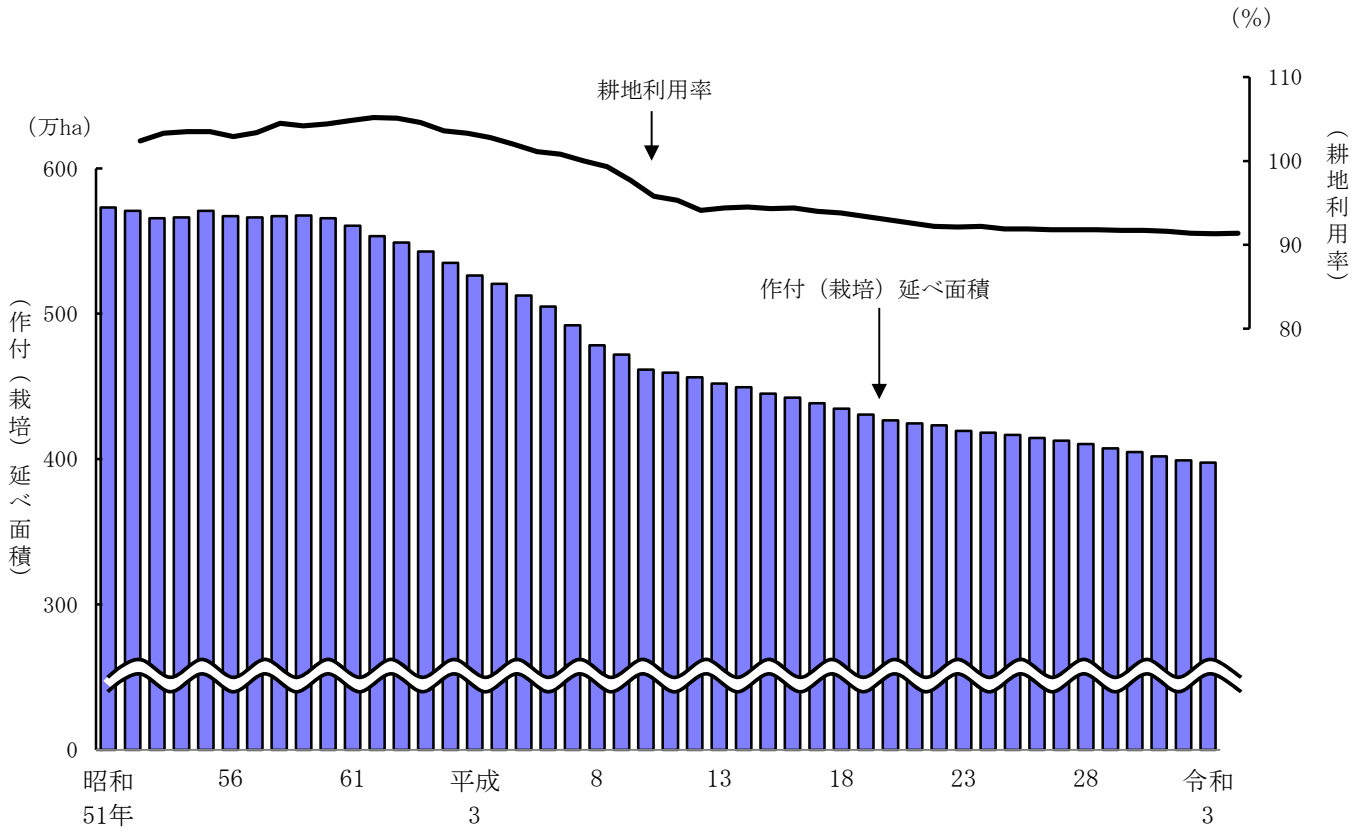
注：耕地利用率とは、耕地面積を「100」とした作付（栽培）延べ面積の割合である。

$$耕地利用率（\%）＝\frac{作付（栽培）延べ面積}{耕地面積}\times 100$$

(4)　作付（栽培）延べ面積の動向をみると、昭和49年から昭和60年は麦類の生産振興による作付面積の増加等からほぼ横ばいで推移した。昭和61年以降は作物ごとに増減はあるものの、総体的には減少傾向で推移している（図12）。

(5)　耕地利用率の動向をみると、昭和48年から平成４年までは100％を越えていたが、平成５年に100％となり、平成６年には99.3％と100％を下回った。平成７年以降はほぼ低下傾向で推移し、平成23年以降はほぼ横ばいで推移している（図12）。

図 12　農作物作付（栽培）延べ面積及び耕地利用率の推移



２　夏期における田本地の利用状況

(1)　令和３年夏期（おおむね水稲の栽培期間）における田本地の利用状況をみると、水稲作付田は156万4,000ha（青刈り面積を含む。）で、１万1,000ha（１％）減少した。

水稲以外の作物のみの作付田は40万1,000haで、前年並みとなった。

また、夏期全期不作付地は27万1,300haで、1,700ha（１％）減少した。

この結果、田本地に占める水稲作付田の割合は69.9％、水稲以外の作物のみの作付田の割合は17.9％、夏期全期不作付地の割合は12.1％となった（表15）。

表 15　令和３年夏期における田本地の利用状況

区　　分	面 積	前年との比較		構成比
		対　差	対　比	
	ha	ha	%	%
田　本　地	**2,236,000**	**△ 12,000**	**99**	100.0
水稲作付田	1,564,000	△ 11,000	99	69.9
水稲以外の作物のみの作付田	401,000	1,000	100	17.9
夏期全期不作付地	271,300	△ 1,700	99	12.1

(2)　夏期における田本地の利用状況の動向をみると、米の生産調整が実施されて以降、米の生産調整面積の変動による増減はあるものの、水稲作付田は減少傾向で推移している（図13）。

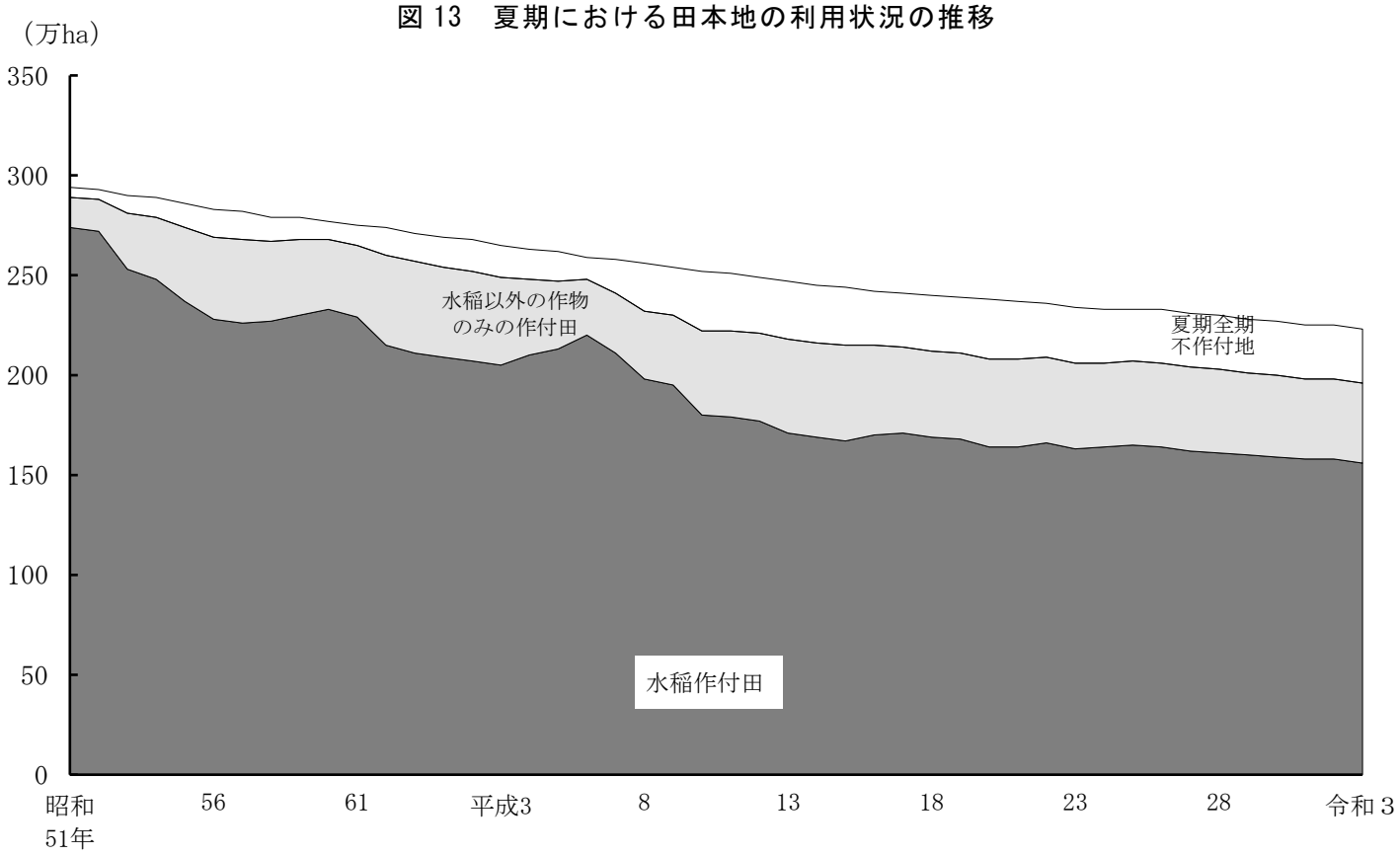



図 13　夏期における田本地の利用状況の推移